

第4回学生向け福祉体感ツアー（in しなのめハウス）開催シーン まとめ

日 時： 平成30年8月31日（金） 午後7時～9時

場 所： しなのめハウス（地域活動支援センター、相談支援事業、就労継続支援B型）

参加者： 大阪医療技術学園専、大阪保健福祉専、大阪バイオメディカル専、関西大学
（合わせて37名の参加）

○ イントロダクション

・昨年末にこれまで活動参加いただいた各学校のご担当者から、ツアー先のご推薦などをご紹介いただきました。その結果、圧倒的に「キャリアセンターご担当者が一度行ってみたいところ」の希望多数（1位）に挙げたのが、今回の「しなのめハウス」です。

・しなのめハウスの活動は「多彩」です。地域における“ホームグラウンド”とはかくあるべし、といわんばかりのその活動に「単なる制度上の類型」を求めるだけの視点だけでは到底理解しえない「何か」を、今回、図らずも体感することとなりました。

○ 基本講演（“2時間きっかり”、菅野施設長による「基本講義」を拝聴しました）



（菅野治子施設長）



（しなのめハウス本館 玄関前）

堺市から徒歩10分もかからないところに、「しなのめハウス本館」があります。

ここには、食事をしたり、憩ったり、生活に関するもの（機材）が一通り揃っています。

ここは、なんと驚くべきことに、利用契約者以外の施設利用も可能だそうです。

（当日シーン） ツアーでも過去最多僅差の参集者35名の方が集まりました。なので、利用者の生活があるピンク色の本館は、個別に別日で見学等をしていただくことになりました（個別連絡、または私まで連絡の上、取次）。この日は、相談支援事業の相談室などがある別館（ちょうど本館の背中合わせの別の建物）の1階で貴重なお話をお聞きしました。



○ 2002年の「月刊ノーマライゼーション」8月号に「こころのふるさと／しののめハウス」という現在も関わりがあるという一利用者（山田礼子さん）の記事を見つけたので、当日の資料として配布しました。以下はそこから抽出した要点（概略）です。

- ・友人が「利用」していると知り、自分も行ってみた。その頃の自分は「障がいを職場に告げずに」働いていた（心の病がある）。
- ・通い始めて、自分にとっての24時間のうち、そこから得られる生活支援はとて大きい。安価で美味しい食事、洗濯、入浴。カラオケ（1曲30円）、麻雀（本当に金銭を掛けられる）。
- ・地域に普通にあって、かつ公的でもあり、最初の1歩を踏み出しやすいオープンな場であってほしい。家族よりも本当に気遣いなく会えたりできる何気ない共に時間を過ごせる場であってほしい（たまにケンカも）。
- ・そういった場所は、故郷の様でもあり、転ばぬ先の杖の役割なのかもしれない。
- ・昔話に出てくる「駆け込み寺」とは、こういった場所であったのかもしれない。
- ・食事が必要なら、そこにある。ただし、1人ではできないことでもみんなで用意し、みんなで後片付けをする。洗濯機を回したければ、そこにある。ただし、1回につき、30円が必要。順番さえしっかり守れば、いつも清潔な服を着るために、洗濯をすることができる。洗濯機を回す間は、自分の心の洗濯までできるかもしれない。

（当日配布した資料の一部を、要約と若者向け翻訳等をさせていただきました）

<当日アンケートのまとめ>

○ 参加者から、①菅野さんのお話を聞いて（感想・意見）、②講義をお聞きする前と後では、来る前にしていたイメージに変化などはありましたか、の2点についてご提出をいただきました（以下）。

1 「菅野さんのお話を聞いて（感想・意見）」 ※青字は質問事項（現在回答待ち）

- ・一人一人のことを大切にすることや、どなたでも受け入れていることは「すごい」。
- ・「君たちはゆくゆくは“サービスを提供する側になる”」という言葉が印象に残った。
- ・ミーティングを職員だけでなく、全員で行うということがすごいと感じました。
- ・現役のワーカーのお話は大変貴重であり、お聞きできて良い経験となりました。非常に楽しかったです。菅野さんのお考えなどをこの先もずっとお手本にしたいと思いました。
- ・感想を素直に言えば「衝撃的」でした。特に利用に「金銭が絡む」箇所は、人間生活上

でも特にシビアなところだったので、利用者などでうまく協力して行っていることを聞いて、単純にすごいと思いました。

- ・この話は究極の「メンバー主体」のお話であると、全体から感じました。何をするのも「メンバーと話し合っ決めていく」、そこが今日の一番の良き部分でした。
- ・何事にも挑戦し続ける菅野施設長の姿勢に凄みを感じた。その人らしい生活を送ることができるような支援、を考えるのであれば、一人一人の支援は全て違って来る、との言葉が印象的でした。まさに誰に為に支援をするのか、ということですね。誰でもできるだけ受け入れるということもすごい一言です。

(ご質問) 菅野さんは、支援者として「一番のやりがい」をどこに感じておられますか？

- ・他ではやらないことを、当たり前だと思って、かつ実行されているのには、本当に驚きました。為になりました（感謝）。
- ・ハウスを立ち上げるまでの「道のり」のお話も大変貴重でした。菅野施設長は大変素敵な方だと思いました。
- ・メンバー主体を標榜し、それを実行している作業所は他にもたくさんあると思いますが、「しのめハウス」ほど、徹底した「メンバー主体」を通しているところにはないと思いました。とても感動しました。
- ・ここに来ないと聞けない話をお聞きできました。ありがとうございました。
- ・分かりやすいお話も多かったが、理解が追いつかないお話もあり、またご訪問させてください。

(ご質問) 募金や寄付などはなぜ多く集まったのでしょうか？

- ・利用者の立場になって考えるという基本的なことについて、多くを学べた。
- ・予想以上の現場のお話を聞くことができ、授業を休んできた甲斐がありました。伝説の菅野さんの生話が聞けて、「菅野さんが本当に人間が好きなんだ」ということがよくわかった。出来ることをまず信じようとする姿勢に感動した。
- ・社会から排除されがちの方々を拒まず受け入れ、管理をできるだけしない姿勢が、結果メンバーによる自治になっていることについては、驚きを通り越してしまいました。
- ・誰でも自分らしく生きていく権利を利用者が達成する時の喜びまでお聞きできて、自分の今後の活動にぜひ活かせたらと思いました。
- ・このような考え方があるのか、このように考えれば良いのか、等々、学校の授業では知ることができない話をお聞きできてとても勉強になりました。

(ご質問) 他地域の方が来るようになった“きっかけ”などあれば教えていただきたい。

- ・今の日本にある、法律や制度に対して、簡単にそれが当たり前だと思ってしまうことの怖さを学びました。

(ご質問) 菅野さんが PSW として一番大切にされていることがあれば教えてください。

(ご質問) 講話中に「当直 2 名配置が実現すればもっと面白いことができる」とおっしゃっていたのですが、もっと詳しくお聞きできますか？

(ご質問) かつて病院でケースワークされていた時に、結局どう接すればわからなかった患者さんの例などがあれば教えてください。

(ご質問) 施設内でメンバーさんが、他のメンバーさんやスタッフに対して暴力などを起こされたことはありますか。あればどういった対応をされたか、知りたいです。

(ご質問) 菅野さんが今までで一番人生観が変わった出来事があれば教えてください。

- ・当たり前に行っていることがすべてではない事例をたくさんお聞きできた。先入観を崩すということが割に難しいのだと実感した。
- ・誰でもできるようなお話では決してなかったと思います。決まりごとがうまく運用されるためにあることを忘れてしまっている自分に気が付いた。
- ・今日の講師は特に素敵でした。尊敬します。
- ・菅野さんが様々なエピソードを話された後に、「それでも生きてはるんやね」とおっしゃられたことがすいぶんと印象に残りました。人は様々な生きざまと背景、個性があるものだという基本的なことに改めて気づくことができました。
- ・今まで、自分が関わってきた方は「不自由さ」「不便」を感じていなかったのかなと思います、支援者である私が当たり前に行っていること・・・「娯楽」「おしゃれ」「サボリ」なども同じように享受できていたのかなと心配になってしまいました。

(ご質問) イスや食器などは「いただきもの」が多いという素敵なお話がありましたが、
どういった経緯（つながり）でいただけるものなのでしょう？

- ・とてもわかりやすいお話だったが、実はレベルの相当高いお話だったことも感じられて、
こういったお話を今晚聞くことができたのはラッキーだったと思いました。

2 講義をお聞きする前と後では、そのイメージに変化はありましたか？

- ・ (訪問前) 地域の一資源に行くというぐらいのイメージ
⇒ (訪問後) 地域にこのような施設が増えればいいな、自分も参加してみたい。
- ・ (訪問前) しのめハウス=制度・サービス色の強い事業所
⇒ (訪問後) 居場所・駆け込むことのできる場、自分のことは自分で決める場
- ・ (訪問前) 一緒にはたらく場所
⇒ (訪問後) 当たり前の人間関係を営む場所
- ・ (訪問前) 職員や市町村／都道府県が関与する施設
⇒ (訪問後) メンバーが作り上げる施設
- ・ (訪問前) 受注した仕事をみんなで行っているイメージ
⇒ (訪問後) 施設で生活を集団で行うために必要な相互のお手伝いそのものが仕事になる (なっている) というイメージ
- ・ (訪問前) どのような制度・事業を行っている場 (なのかな)
⇒ (訪問後) 何でもとにかくやってみる、どのような方でも基本受け入れる場
- ・ (訪問前) どれだけ厳しいルールがあるのかな
⇒ (訪問後) 相互に人として自然な感覚で話すことから、自然に創り上げられるルールがある。良い意味で非常に緩いことがその可能性を高める
- ・ (訪問前) その人らしさを考えるためにルールを作る
⇒ (訪問後) その人らしさを奪わないということから、ルールが創生される。
- ・ (訪問前) メンバーをどう管理するか
⇒ (訪問後) メンバー同士の対話を誘発する (為の仕掛け)
- ・ (訪問前) サービスを活用する側からサービスを提供する側になるというお話はかなりスケールが大きすぎるのでは？
⇒ (訪問後) 支援側が根気と計画力を強く持てば、実現可能である。

- ・（訪問前）特に何も思っていなかった。
⇒ （訪問後）特に変化はない。とても自由でのびのびしているなど感じた。
- ・（訪問前）施設の概要やオーナーからの実施状況の説明があるというイメージ
⇒ （訪問後）全く予期できなかったほどの「実例」「実際に会った方々の背景」「価値観」などをシャワーのように浴びられた。予想外のこの衝撃感。

注：イメージの変化について ⇒訪問前はいわゆる一般的な「訪問前価値観」だったのが、訪問後に「大きく奥深く変化している」ことが印象的。
たまたま「変化なし」とのお答えもあったりし、こういったことが「具体的なアンケート」として入手できたことも
これが「これからの方＝ツアー参加者」企画であったのだと改めて感じられたりして、私自身、ちょっと安心しました（前野）。

（編集後記） 病院でケースワーカーを永きにわたって定年まで勤められ、そのご勤務の早い段階で、「個人の事由（本当の自由）」が額面上の支援の限界を拓けることに気づき、院内にサロンを運営し、その時に培ったアイデアを基に、現在の「しののめハウス」を創設された「菅野治子」施設長のお話は、その語り口同様、たいへん分かりやすく、得難い時間をいただけたと感謝です。

ただ、これが他の人にも「たやすくできることか？」と言われれば、かなり難しいことなどだとも、同時に感じさせられる時間にもなったようです。

帰りがけのご挨拶をしている中で、「真似のできないことだらけでした」と感想を申し上げると「真似なんかはしなくていいのでは？」と切れ味するどいお返事があったのが大変印象的でした。

諸事がもやもやと閉塞感に陥った時、支援があれば「何とか自分でできそうだ」と感じる時、独りでは寂しすぎるとき、地域で必要な場所とは何か、それを考えるのは、人の真似だけでは到底できないよ、と、菅野さんの眼がそうおっしゃっておられました。菅野さんに言わせれば、しののめハウスの方々は「自分を自分らしく表現しているだけ」なのだそうです。

「自分らしさ」・・・ この日は、特に支援をする者の基本的な心構えの奥深さを特にいろいろ考える日になりました。半年に1回は今日のような日も必要ではないかと改めて感じた次第です。

大阪市就ポツ 前野